

授業力向上推進プロジェクト委員会

所属： 岐阜県立岐山高等学校

氏名： 田中 由美

1 個人テーマ：「話すこと [やり取り]」及び「話すこと [発表]」における観点別学習状況の評価

2 テーマ設定の理由：

新学習指導要領の実施を前に、私自身の課題とすべきことは「指導と評価の一体化」であると考えた。授業の中で指導したことの定着度を確かめるための評価ができていだろうか。五つの領域について、改めてこれまで行ってきた授業やテスト、評価の方法を振り返ってみると、「話すこと」の実践が十分にできていない。一方で、今年の4月、3年ぶりに1年生の授業を担当した際に、中学校を卒業したばかりの生徒たちが、ペアでの自己紹介（スピーキング）や、自分の意見を簡潔な英語で書く活動（ライティング）において、積極的に表現し伝えようとする姿に感動した。これまでに彼らが培ってきたこのような力や態度を、高校でも育てていかなければと強く感じた。そこで、今年度は「話すこと」「書くこと」に焦点をあて、授業での学びをパフォーマンステストで適切に評価するための実践を行った。

3 研究内容（取組内容）：

①音読活動からリテリング、そして発表、やりとりの活動へ

「指導と評価の一体化」という点において、ただパフォーマンステストを実施すればいいという訳ではない。ペーパーテストと同じように、授業や家庭学習など日常的な学習の中で積み重ねてきたものを評価するためのパフォーマンステストとするために、次の2点を意識した。

- ・単元の最初に「いつ」「どのような」テストを「どのように」行うかを生徒に提示する。
- ・授業中や自宅学習課題として、繰り返し教科書本文を音読させ、リテリングへとつなげる。

まず、リテリングの前後には、音読活動を重点的に行い、言語材料の内在化を図った。リテリングは、特定のキーワードを用いて、本文の内容を自分の言葉で伝えられるように、授業内で繰り返し行った。また、後期中間考査前の授業時間2時間をパフォーマンステストに充て、実施形態は生徒対教員の1対1のインタビュー形式で行った。

②新学習指導要領における三つの観点での評価

パフォーマンステストを実施するにあたっては、新学習指導要領の三つの観点「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」での観点別学習状況の評価方法について考えた。以下、成果と課題に示す。

4 成果

パフォーマンステストを実施するにあたり、当該単元に入る前にテストの概要を要項で示したことで、同じ学年を指導する教員だけでなく生徒にも「つけたい力」とそのための取り組みを意識させることができた。教科書の内容を理解し、学んだ表現を使えるようになるためには、内容理解と音読練習が必須となり、どんな家庭学習を行えばいいかの指標となる。そのように自主的に取り組み付けた力が、テストによって評価されるという展開にもつながっていく。実際、単に「音読しよう」と一斉に音読させるのと、「今回は〇〇の表現が使えるようになるために、まずは音読を繰り返そう」と目的を意識させた場合とでは、生徒の取り組み方が明らかに変わった。音読を、表現まで発展させるには、内容理解が必須であり、教科書の内容を基にリテリング、発表、やり取りへと進んでいく。そのように身に付けた力が自分の体験や考えを表現する段階に発展することで、生徒は学びが実際に活用できるようになったと実感する。パフォーマンステストのみでなく、定期考査等のペーパーテストでも確認することで、さらに「指導と評価の一体化」が実現すると考える。

また、自分自身の「教材研究」の在り方を改めて考えるきっかけとなった。これまで「知識・理解」に偏った「読むこと」中心の授業展開から抜け出せずにはいたが、生徒に学んだことをどう生かしてほ

しいかという点に重点を置くだけでも、教材の見方、活用の仕方、どのように指導してどう評価するかまでの見え方が変わってくる。出口を明確に設定し、目的達成のために授業展開を工夫していくことで、より楽しみながら自信をもって教壇に立てると感じた。

「思考・判断・表現」については、事前に具体的な条件を示して、[発表] や [やり取り] を評価するなど、テストの際に評価すべきことを明確にすることが重要である。今年度実施した1回と、計画した1回のパフォーマンスについて、次に課題として示す。

5 課題

①すべての単元でパフォーマンステストを実施し「話すこと[やり取り]」「話すこと[発表]」の評価を行うことは難しい。学年末に総括する際に両方の評価資料を残すために、今年度は、後期中間考査(Lesson5)で[発表]、学年末考査(Lesson7)で[やり取り]のテストを行う予定であったが、結果的に実施できたのは1度だけであった。テストで何を測るのかを明確にし、1年間、さらには3年間を見通した指導計画が必要である。また、[やり取り]のテストを計画する際に、生徒同士で質問を考え、対話を広げられる姿をイメージしたが、実際に授業で取り組ませたところ、「質問を考える」ということ自体が生徒たちにとって難易度の高い課題であると気づいた。スモールトークなどの帯活動を組み込み「質問する」という課題を全員が達成できるような活動を日常的に取り入れる必要がある。「めざす姿」に向かっていけるような授業の仕組みを、細部まで考えることも課題である。

リテリングに向けた最初の取り組みとして、キーワードを使って本文の要約文を「書くこと」から始めた。「話すこと」の準備段階として設定したが、先に書かせると発表や、やり取りではなく、書いたものをただ音読するだけの活動となってしまった。また、実際のパフォーマンステストでは、教科書の内容に関する追加の質問に答えさせる際に「教科書を見ても良い」としたところ、自分の言葉で表現するのではなく、教科書の該当する本文を音読する生徒がほとんどであった。リテリングから、発表、やり取りへと表現の難易度を上げていくには、それに合った指示や発問、状況設定を行うことが重要である。

②3観点による観点別学習状況の評価を、「話すこと [やり取り]」について以下のように設定した。

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
a	【知識】 ・語彙や表現を適切に使用している。 【技能】 ・聞き手にわかりやすい音声や発音で話している。	2つの条件を満たした上で、関連した情報を詳しく述べて伝えている。	2つの条件を満たした上で、関連した情報を詳しく述べて伝えようとしている。
b	・多少の誤りはあるが、理解できるような語彙や表現を使って話している。 ・理解できる程度の音声等で話している。	2つの条件を満たして話して伝えている。	2つの条件を満たして話して伝えようとしている。
c	「b」を満たしていない。	「b」を満たしていない。	「b」を満たしていない。

「思考・判断・表現」についての2つの条件

1:教科書に記載されている内容に関する質問に対して、適切に述べている。

2:教科書には直接的には記載されていない内容に関する質問に対して、自分の考えを理由とともに述べている。

それぞれ目的、場面、状況及び具体的な評価基準について具体的に示すことで、生徒は明確な目標をもって授業での言語活動に取り組み、教員も適切に評価をすることができる。「指導と評価の一体化」という視点を常に念頭に置き、今後も授業と評価の改善に取り組んでいきたい。